

富山市茶屋町西山遺跡 発掘調査報告書

－都市緑化植物園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

2001

富山市教育委員会

序

富山市は、富山県のほぼ中央にあって、北は日本海に面し、東は立山連峰を望み、西には緑豊かな呉羽山丘陵を仰ぐ風光明媚な土地であります。恵まれた大自然の中、多くの先人たちが育んできた貴重な文化財は、富山の歩んできた歴史を知るためのかけがえのない財産であります。これを保護し、未来へ継承していくことは、私たちが果たさなければならない責務といえます。

現在、富山市には約600か所の遺跡が確認されています。なかでも呉羽山丘陵西麓には、起伏に富んだ地形を利用して200か所にも及ぶ遺跡が集中しております、まさに遺跡の宝庫となっております。

茶屋町西山遺跡は、この呉羽山丘陵西麓の一角に位置する遺跡であります。周辺には縄文時代中期の国史跡北代遺跡を復元整備した「富山市北代縄文広場」があり、多くの市民の皆さんが訪れる歴史学習の場、憩いの場として親しまれています。

このたび本市が施工する都市緑化植物園建設に伴い、茶屋町西山遺跡の発掘調査を行ったところ、縄文時代後期の竪穴住居跡が検出されました。このことは、呉羽山丘陵における縄文時代の遺跡の移り変わりを明らかにする上で貴重な資料となります。

このような調査成果をまとめた本書が、私たち共有の財産である埋蔵文化財を理解していただく上で参考になれば幸いです。

最後に、調査にあたりご理解ご協力をいただきました地元呉羽地区の皆様をはじめ、富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センター、株式会社中部日本鉱業研究所、各関係機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

富山市教育委員会
教育長 大島哲夫

例　　言

- 1 本書は、富山市茶屋町字長削地内に所在する茶屋町西山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、富山市都市開発部公園緑地課が行う都市緑化植物園整備事業に伴う本調査である。
- 3 調査は、富山市教育委員会の指導・監理の下で㈱中部日本鉱業研究所が実施した。
- 4 調査期間は、平成12年8月29日から平成13年3月12日まで現地発掘調査および出土品整理、報告書の作成を行った。
- 5 調査は㈱中部日本鉱業研究所 墓藏文化財調査室 高野裕二が担当した。
- 6 調査参加者は次のとおりである。
井原憲吉、野崎勉、野上信子、長島むつ子、武脇昭子（以上、下村シルバー人材センター）
大庭麻起子、高橋英史子、渡辺賀世子、境しのぶ
7 遺物の整理にあたっては、㈱中部日本鉱業研究所の以下の者が参加した。
大庭麻起子、高橋英史子、渡辺賀世子、境しのぶ、加藤えつこ、辻口さゆり
8 出土品および原図・写真類は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。
- 9 本書の執筆は富山市教育委員会埋蔵文化財センター主任学芸員 古川知明がII-1を行い、その他は高野が行った。
- 10 調査および資料整理にあたり、次の諸氏並びに機関よりご協力・ご指導を賜った。
また、地元奥羽地区にご協力を得た。記して謝意を表します。
(敬称略)
富山県埋蔵文化財センター、利波匡裕、東久留米市埋蔵文化財調査団 玉井久雄

凡　　例

- 1 遺構の表記については、堅穴住居跡はSI、土坑はSK、小ピットはP、風洞木板はWとし、その後に通し番号を付した。
- 2 調査にあたって国家座標を使用し、南北をX軸、東西をY軸とした。
- 3 本文中のグリッドは東西方向にアルファベット、南北方向に数字で表す。杭の数字はX,Yの数値である。

目　　次

I	遺跡の概要	1	IV	まとめ	17
1.	茶屋町西山遺跡の位置と環境	1	図版	19	
II	調査の概要	3	写真図版	22	
1.	調査に至る経緯	3	報告書抄録	32	
2.	調査の経過	3			
III	発掘調査の結果	4			
1.	調査結果の概要	4			
(1)	基本層序	4			
(2)	遺構の概要	4			
(3)	遺物の概要	4			
2.	遺構について	8	挿　　図		
(1)	1号堅穴住居跡	8	第1図	茶屋町西山遺跡と周辺の遺跡	
(2)	土坑	12	第2図	調査区域図および試掘確認調査結果図	
(3)	小ピット群	12	第3図	全体遺構図	
3.	遺物について	14	第4図	基本土層図	
(1)	1号堅穴住居跡からの出土遺物	14	第5図	1号堅穴住居跡および土坑 平面図・土層図	
(2)	小ピット群からの出土遺物	14	第6図	1号堅穴住居跡 住穴および小土坑 平面図・土層図	
(3)	遺構外からの出土遺物	15	第7図	SK1および小ピット群 平面図・土層図	

I 遺跡の概要

1. 茶屋町西山遺跡の位置と環境

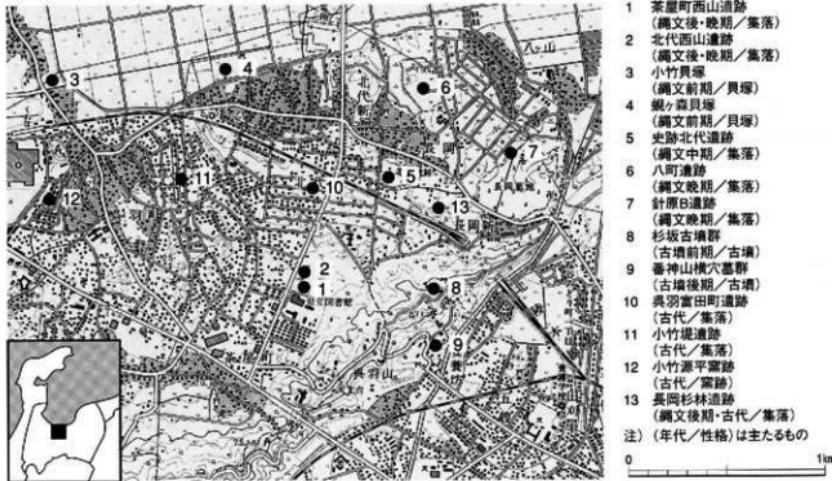
茶屋町西山遺跡は、富山平野のほぼ中央を南西から北東に走る呉羽山丘陵の西麓に位置する縄文時代後・晚期の遺跡である。この呉羽山丘陵は富山市八ヶ山から婦中町友坂までの全長約7km、最大幅約2kmにおよぶ。丘陵の東側は神通川とその支流井田川に近接し、急斜面を形成する。西側は緩斜面のため昔から良好な耕作地として活用されてきた。

遺跡は丘陵の西側緩斜面および丘陵から続く舌状台地の縁辺に位置している。付近の標高は約20m、遺跡の南西部から北東部にかけて緩やかに傾斜し、北西端にて小支谷の谷頭へと落ち込んでいる。谷底では湧水がみられ一帯はシワリダニのツツミ（堤）とよばれる溜め池となっている。

呉羽山丘陵には、旧石器時代から歴史時代に至るまで数多くの遺跡が存在し、富山県内遺跡の密集地帯の一つに数えられる。縄文時代前期には台地周辺の沖積地に親ヶ森貝塚、小竹貝塚などの貝塚遺跡が形成されており、近辺に湯沼が広がっていたことがわかる。中期には史跡北代遺跡に代表される集落跡が台地上に多く出現する。北代遺跡は旧石器時代から平安時代までと長期にわたる複合遺跡で、中期前葉から末葉までに約70棟以上の堅穴住居跡が確認される集落跡である。後期には台地の北寄りに遺跡が分布するようになり、長岡杉林遺跡では堅穴住居跡が確認されている。晚期には八町遺跡、針原B遺跡など台地周辺の沖積地に遺跡が分布する。

弥生時代末から古墳時代には、丘陵の東側に前期古墳の杉坂古墳群をはじめ、県内最東端の横穴墓群である番神山横穴墓や呉羽山古墳が築かれる。また丘陵の南西端の杉谷台地には、四隅突出型方墳を有する杉谷古墳群があり、出雲地方との地域間交流をみてとれる。

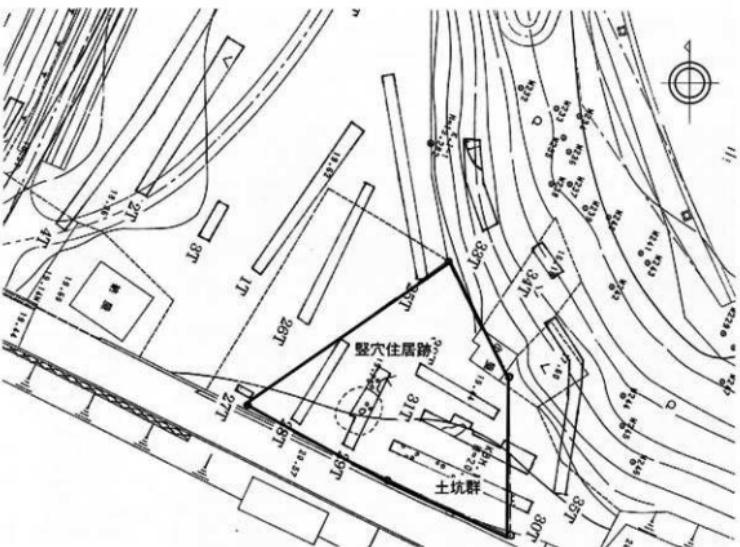
奈良・平安時代においては、瓦塔など仏教的色彩の強い遺物が出土した長岡杉林遺跡、9世紀初頭の住居跡を擁する呉羽富田町遺跡等の集落遺跡のはか、双耳瓶や長頸瓶が焼成された小竹源平山窯跡がある。



第1図 茶屋町西山遺跡と周辺の遺跡



調査区域図 1:2500



試掘確認調査結果図 1:500

第2図 調査区域図および試掘確認調査結果図

II 調査の概要

1. 調査に至る経緯

茶屋町西山遺跡は、昭和63年から平成3年に行われた市内分布調査で新たに発見された遺跡である。遺跡は平成5年3月発行『富山市遺跡地図（改訂版）』に登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られることになった。

平成3年、富山市都市開発部公園緑地課から都市緑化植物園計画が提示され、計画地内に所在する埋蔵文化財包蔵地3か所の取扱いについて協議を行った。

地元の合意のもと、茶屋町遺跡20,000m²、北代西山遺跡2,000m²の2箇所を対象に、平成4年11月～翌5年3月試掘確認調査を実施した。調査の結果、茶屋町遺跡では約8,800m²に縄文時代の竪穴住居跡、平安時代の製鉄炉等の遺構を、また北代西山遺跡では約2,000m²に縄文時代の土坑等の遺構を検出した。北代西山遺跡の範囲はさらに東側へ拡がる。

平成11年度には北代西山遺跡において緑化・園路造成工事に伴う1,230m²の発掘調査を実施し、集石土坑等を検出した〔富山教委2000〕。

また茶屋町西山遺跡においても緑化造成工事が計画されたため、平成11年10月新たに試掘確認調査を実施した。調査の結果400m²に縄文時代の竪穴住居等の所在を確認した。その範囲は全て削平を受けるため12年度において400m²の発掘調査の実施が必要となった。

調査の実施にあたっては、市教委において十分な調査体制がとれなかったため、民間委託を活用して行なうこととし、市教委の監理のもと株式会社中部日本鉱業研究所が発掘調査を担当した。

調査は平成12年8月29日に着手し、同年11月13日に完了した。延べ48日間を要した。

2. 調査の経過

8月29日より本調査に着手する。8月30日までバックホーにより表土掘削を実施。調査地区は南西部から北側および東側に緩く下降することを確認。また、調査区南西部に炉を伴う竪穴住居跡の存在を確認する。

8月31日より㈱中部日本鉱業研究所コンサルティング部によるグリッド設定を実施。5m間隔で杭を設定する。

9月5日より調査区南側壁面から基本土層を確認。調査区南東端から北西側に向かって遺構確認作業をすすめ多数の小ピットを検出。9月18日より中央部南側の確認作業を実施。続いて東側・北側へ移行する。確認作業と平行して遺構の半裁・計測作業を開始。

10月5日には南東端から検出された土坑の精査を実施。10月13日より竪穴住居跡の精査を開始。各所にサブトレーナーを設定して遺構プランを確認する。続いてセクションベルトを設定し住居跡内の覆土を掘り下げる。搅乱部分より磨製石斧1点検出する。

10月27日より竪穴住居跡の計測を実施。また北部より小ピット数基を検出し精査を実施。また北東端部分の確認作業の結果、地山土が調査区北側の谷部に向けて急激に落ち込んでいることを確認。

11月6日より竪穴住居跡内の炉について精査を実施。覆土内より埋設土器1個体を検出する。

11月9日航空測量および空中写真撮影を実施。

11月13日機材等を撤収し現場調査を終了する。

III 発掘調査の結果

1. 調査結果の概要

(1) 基本層序

調査区域は南側から北側および東側に向かってなだらかに傾斜し、北東端では急傾斜となって谷側に落ち込んでいる。層序は第1層・耕作土、第2層・暗褐色土、第3層・暗黄褐色土、第4層・黄褐色土となっている。このうち第2・3層が遺物包含層、第4層上面が遺構確認面である。確認面の標高は南壁の東端で19.6m、若干の起伏を繰り返しつつ下降して西端で19.4mとなっており高低差は約20cmである。遺物包含層である第2層は5~15cm厚で、東端で薄く堆積し、中央から西端でやや厚くなる。第3層は5~10cmで、東端では確認されず、中央部で最も厚くなり、西端で再び薄く堆積する。第1~3層全体の堆積をみると東端50cm、中央70cm、西端で40cmとなっており中央部の堆積が最も厚い。

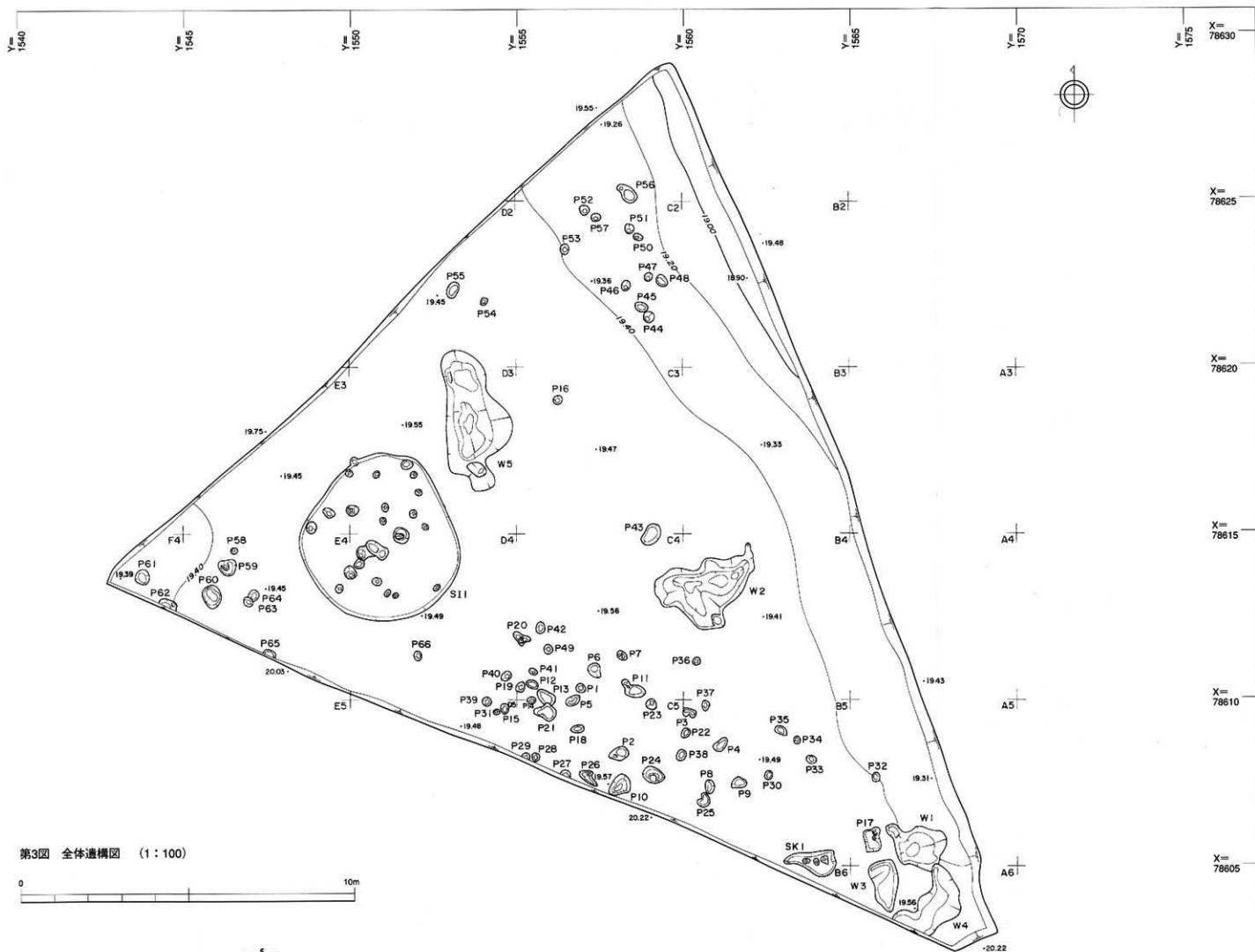
(2) 遺構の概要

調査区域の南西部D3・D4・E4・E5グリッドにおいて、後期の竪穴住居跡が1棟確認され、南東部のB5・B6グリッドでは土坑1基が検出された。また南部のB4・B5・C4・C5・D4・D5グリッド、北部のC2・D2グリッド、西部のE4・F4グリッドにはそれぞれ小ピットが密集して確認されており、合計66基が検出された。さらに南東部A5・A6グリッド、中央部B4グリッド、西部D3グリッドには風倒木痕が6ヶ所確認されている。遺構分布の全体的傾向は調査区の南側が最も密度が高く、調査区南端壁に沿って東西に帶状に分布がみられ、中央部では希薄となる。北部で再び小ピットの分布が見られるが南側程の密度ではない。

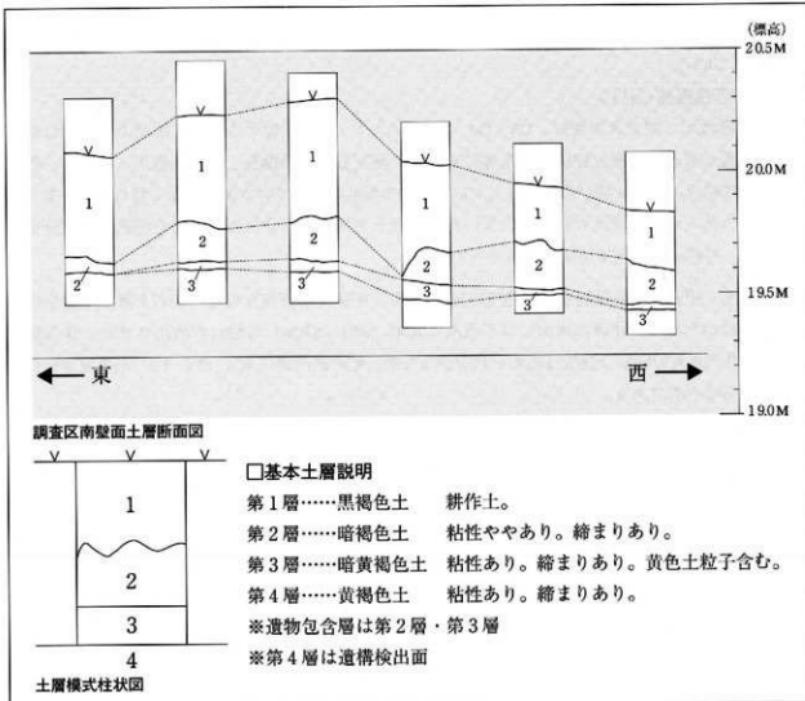
(3) 遺物の概要

土器：縄文時代前期および後期・晩期に属する土器が総数で276点検出されている。時期別にみてみると、前期のもの1点、中期末～後期前半に比定されるもの約10点、後期後半のもの約10点、後期後葉～晩期のもの約5点、型式不明だが後期に属するもの約200点となっており、後期前半から後半、晩期にかけての資料がほぼ連続して検出されている。大半の資料は小片で出土しており、器形の復元可能な資料は竪穴住居炉跡内から出土した埋設土器1個体のみである。調査区全体の遺物分布は南側の遺構が集中する区域において濃密となっている。出土した土器の60%は南東部の風倒木痕から出土しており、総数は108点である。遺構に伴う資料は少なく、明確なものは竪穴住居内の炉埋設土器および小ピット内から検出された土器約20点のみである。

石器：磨製石斧1点、石鎌1点、スクレイパー1点、ナイフ型石器1点、剥片2点の計6点が出土している。磨製石斧は竪穴住居跡、ナイフ型石器は小ピットから出土されており、それ以外は全て風倒木痕からのものである。とはいへ磨製石斧は攪乱部分からの検出であり、その形態から後期に属するものと考えたい。またナイフ型石器は小ピットから出土しているが周囲の状況から旧石器時代に属する遺構と考えにくく、覆土へ流入した可能性が高い。



第3図 全体構造図 (1 : 100)



第4図 基本土層図

茶屋町西山遺跡出土土器の分類

茶屋町西山遺跡より出土した土器は全て縄文土器で、遺構内・外のものを合計して276点（細片・一括資料含む）が出土した。検出された資料の大半は小片であるため器形がうかがえるものはほとんど存在しないが、これらを主に文様や胎土、焼成等の特徴によっていくつかの群に分類・整理してみた。

- ・早期末～前期初頭のもの（図版1-11）
胎土に纖維を含む厚手のもの。焼成不良でやや脆い。
- ・中期末のもの（図版1-12）
太い隆背を特徴とする。
- ・後期前半の一群（図版1-1～10、12～17）
沈線と縄文を特徴とする一群。地文に縄文（RLの斜位又は継位の縄文）が施文され、やや浅めの沈線が横走する
- ・後期後半の一群（図版1-18～23）
横走する凹線文や貝殻条痕文を特徴とする一群。
- ・後期終末～晚期初頭の一群（図1-24～28）
- ・無文または縄文のみの一群（図版1-29～55）
細別型式は不明だが後期に属すると思われる。

2. 遺構について

(1) 1号竪穴住居跡(SI1)

位置・遺存状況：調査区南西部、D3・D4・E3・E4グリッドに位置する。調査区域の南西部は耕作による擾乱が著しく、竪穴住居跡内全体にも細長く伸びる溝状の擾乱土が複数横切っている。特に住居跡西側部分の遺存状態が悪く、覆土から床面まで擾乱を受けている箇所が多く見られる。また、全体に掘り込みが浅く擾乱の影響が大きいため、図上での復元作業により構造を把握した部分も少なくない。柱構造の配置等不明点も多かった。

規模・形態：平面形は直径約5mの不整形円形である。中央やや東寄りの床に炉石と埋設土器を伴った土器埋設炉を有し、住居の床面には不規則に20本（SP1～SP20）の柱穴が検出された。住居跡内には炉・柱穴以外の特別な施設は認められなかったが、炉の南西側に小穴（P1・P2）が確認された。小穴の性格は不明である。

覆土：住居覆土上部が擾乱を受けており、特に南東側の覆土は大部分が擾乱により削平されている。残存する覆土の観察により基本的には2層に分層できる。1層と2層の分層は炭化粒子等の混入量と色調から判断している。

1層は炭化粒子を多く含む暗褐色土、2層は黄褐色土の粒子を含む暗黄褐色土からなり、1層・2層ともに住居跡の縁辺から中央部に向けてやや窪む形で堆積している。遺物の検出は1層・2層とも僅かで、炉周辺から土器片が若干検出される程度である。

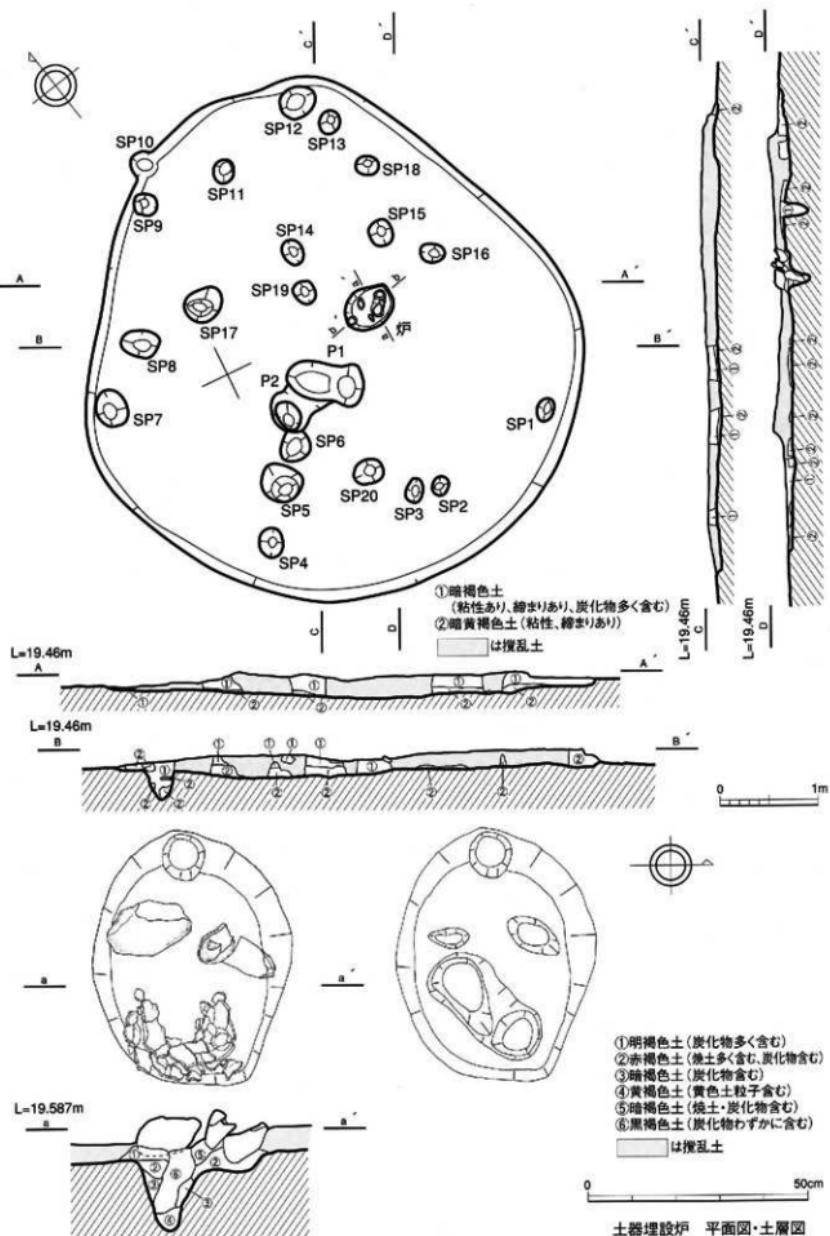
床：床面は縁辺から中央に向けて緩やかに窪み、住居跡中心部および炉周辺で僅かに高まりがみられる。床面の掘り込みは浅く縁辺では約5～6cm、最深部で15～20cm程度であった。

炉：平面形は長径約80cm、短径約50cmの橢円形状である。炉の掘り込みは約15cm程度と浅いが、東側に直径15cm、深さ50cmの掘り込みがみられる。上面には炉石が組まれ、炉内部に深鉢底部が埋設された土器埋設炉である。

炉の西側部分では2組の炉石が確認された。直径10～20cm程度の橢円形の砾で、被熱により全体が赤く変色しており、いずれも割れた状態で検出された。本来は石組みがなされていたと考えられるが炉の東側上面が擾乱により削平を受けており、形態は不明である。他の炉石は住居の覆土内および調査区内から検出されることなかった。

また炉東側には、土器底部を含めた胴部下半部が埋設されていた。土器はが南東部側の掘り込み面に置かれ、南方方向へ口を向けて横倒しの状態であった。出土したのは下半部のみで、上半部は炉覆土内および調査区全体からも検出されていない。炉の覆土は1層～6層からなり、6層が1層～3層を突き抜けているなど複雑な層をなしている。

また、炉の西側、埋設土器の周辺および土器を取り上げた後の掘り込み面に焼土が認められた。炭化物を含む繊維の良い赤色土が約5cm程度の層をなして堆積しており強い被熱を受けている。床面を掘り窓めて火を焚き、その後に焼土・炭化物を含む土で埋めて土器を設置したと考えられる。



第5図 1号竖穴住居跡および土器埋設炉 平面図・土層図

柱穴 (SP1~20)：住居跡床面より柱穴と思われる小ビット20基を検出した。いずれも住居床面全体にわたって不規則に配置されている。擾乱の影響もあり、これら小ビットの配置に一定の規則性を見いだすことが困難であったため、主柱穴の設定や具体的な柱構造の全体配置を把握することが出来なかった。従ってここでは検出された柱穴痕について口径・深さなど形状の特徴から大きく二つのタイプに区分し、整理してみるとどめる。

①タイプA：14基 (SP1・SP9~15・SP18~20)

口径が15~17cm、確認面からの掘り込みが10~15cmの一群。住居跡北側部分にやや偏って検出されている。口径15cm程度のものが大半を占めており、深さはSP6のみ10cm、他はほぼ15cmである。覆土の堆積状態についてはSP1・SP10・SP19は炭化粒子を多量に含む縮まりのある暗褐色土と黄色土粒子がやや混じる暗黃褐色土の2層からなる。SP9・SP11~15は暗褐色土の1層のみである。いずれも掘方はなくほぼ円形に近いプランのものが主である。

②タイプB：6基 (SP2~6・SP17・SP20)

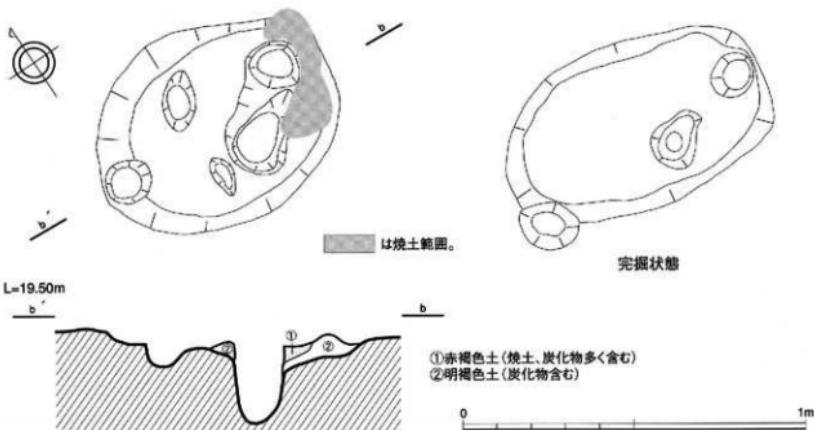
口径が20~30cm、確認面からの掘り込みが10~15cmの一群。住居跡西側および南側より検出されている。SP2~4・SP6・SP20は掘方がない円形プランで、口径は20cm~25cm、深さは約20cm。SP5・SP7・SP17は掘方を持っており口径は15cm~30cm、深さは20~25cmとなっている。形状から見て主柱と考えられるがこれら3基以外に同様の柱穴は見つかっていない。覆土はSP2~4が1層、SP5~8・SP20が2層であり、1層は炭化物を含んだ暗褐色土、2層は黄色土粒子が混じる暗黃褐色土である。

小土坑 (P1・P2)：住居のほぼ中央、炉の西側に2基検出された。P1は長径約80cm、短径約40cmの楕円形で、地山からの掘り込みは深さ約20cmである。覆土は1層が明褐色土、2層が暗褐色土、3層が暗黃褐色土でそれぞれ炭化物を含んでいる。P2は長径約50cm、短径40cmの楕円形で深さは25cm。覆土は1層のみで炭化物を含み縮まりがややある暗褐色土である。2基の小土坑が切り合う形で検出されており、土層から見てP2の形成後にP1が掘り込まれたと考えられる。当初は柱穴を想定して調査を進めたが、長径が長く不均一な楕円形を呈しており、遺構としての性格は不明である。

竪穴住居内の遺物出土状況について

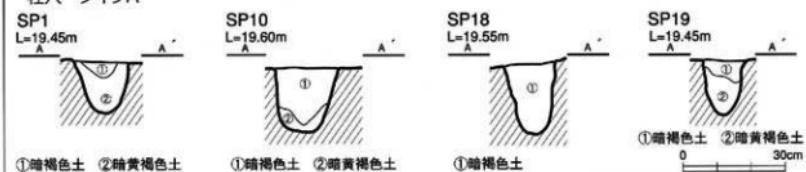
住居範囲内から埋設土器1個体、土器小片9点、石器1点が検出された。土器小片のうち6点は埋設炉に伴うもので、埋設土器と同一個体のものであった。他の3点はいずれも住居全体から散漫に検出されたもので、覆土上層からの出土であった。磨製石斧1点は住居南東部付近で検出されたが、擾乱部分からの出土であることから遺構に伴う資料と決定することは出来なかった。確実に住居に伴う資料といえるのは炉埋設土器1個体分のみである。

竪穴住居の時期：炉埋設土器および覆土内で検出されたの土器の組成からみて縄文時代後期の遺構であると考えられる。

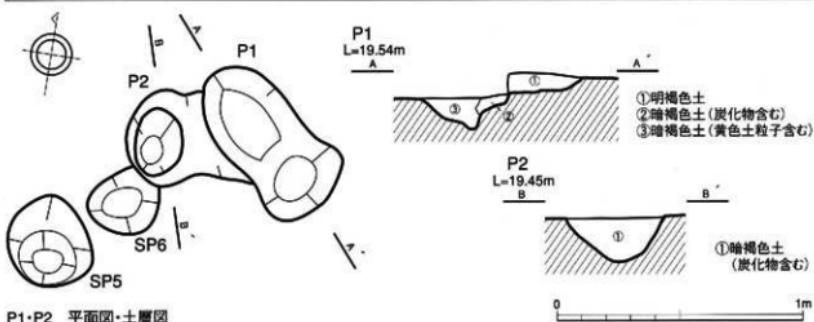
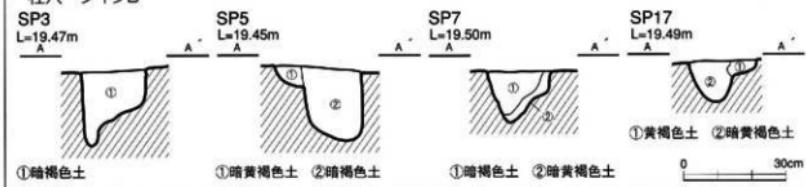


炉焼土分布図・土層図

柱穴 タイプA



柱穴 タイプB



P1-P2 平面図・土層図

第6図 1号竪穴住居跡 柱穴および小土坑 平面図・土層図

(2) 土坑<SK1>

位置・特徴：調査区南東部、B5・B6グリッドに位置している。平面形は梢円形に近い形状で長軸約1.5m、短軸15~20cm。東側の幅が広く、西側がすばんんでいる。掘り込みは北東部が約20cmとやや深く、南部・西部が5~6cmと浅くなっている。覆土は1層のみで炭化物を僅かに含む暗褐色土である。覆土内から縄文土器片が検出されているが細片のうえ摩耗が著しいため時期は明確でない。遺構としての性格は不明である。

(3) 小ビット群<P1~P66>

位置・特徴：調査区南部、北部、西部の三地区において検出された小ビット群。口径が約20~50cm、確認面からの深さが約10~40cmの小穴がまとまりを持って分布している。

地区別にみてみると南部ビット群はB5・C4・C5・D4・D5グリッド内に集中して検出されており、P1~15・17~43・P49・P66の45基が確認された。調査区全体でもこの南壁面近くのビット群が最も密度が高く分布しており、なかでも1号竪穴住居南東側にあたるC4南西部やC5西部付近に密集している。これら的小ビットは口径が20cm、深さ15cm程度の円形プランのものが大半であるが、P10のみ口径50cm、深さ40cmとやや大きい。P19・P21・P24・P60なども口径が50~60cmあるが深さは10~20cm程度である。掘立柱建物の柱穴を想定して配列を試みたが、ビットの密集度合いが非常に高く、かなりの重複関係にあると思われることから具体的な柱構造を見いだすことは困難であった。

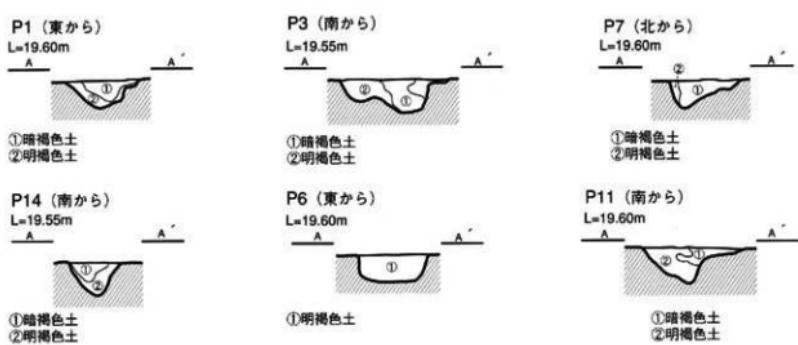
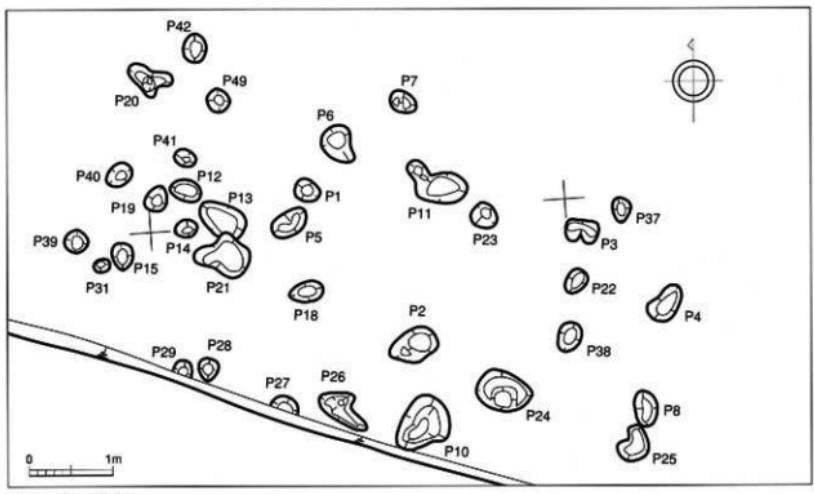
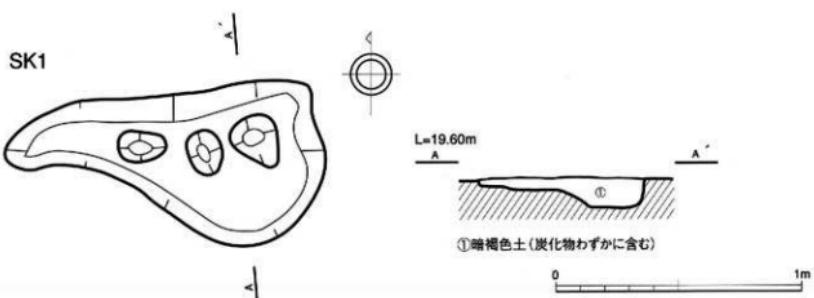
北部ビット群はD2・C2・C3グリッド内、確認面が北側の谷へ向かって落ち込む付近に分布している。口径20~30cm、深さ約10~15cmのものが大半であり、P44~48・P50~P57の13基を検出した。小ビットの分布は南側ビット群に比べると散漫で密集度が低く、建物跡などは想定できない。

西部小ビット群は1号住居跡の南西側、E4・F4グリッド内に分布しており、調査区南壁面に沿うようにP58~P65の8基が確認されている。小ビットの大半は口径15cm、深さ15cm程度の円形プランであるが、P59・P60は口径約50cm、深さ15cmとやや大きい。

小ビットから検出された遺物は縄文土器21点、石器1点、礫4点の合計26点で、このうち24点が南部ビット群からのものである。

風倒木痕（W1~5）について

調査区南東部A5・A6グリッド、調査区中央東寄りのB4・C4グリッドおよび1号竪穴住居跡の北東側D3グリッド内において風倒木痕が5箇所確認された。いずれも長径1.5~3m・短径1~1.5m程度の不定形な梢円形状のものである。遺物検出が多くみられたのは調査区の南寄りに位置するW1~W4からであり、中期末・後期・晩期の土器小片および石鎚等の遺物が合計で約130点検出されている。遺構外出土遺物の大半はこれら風倒木痕からのものであり、遺物包含層からの流入と考えられる。



小ピット群 土層図

第7図 SK1および小ピット群 平面図・土層図

3. 遺物について

(1) 1号竪穴住居跡からの出土遺物

縄文土器 (図版1-1~6)

1は炉覆土内から検出された埋設土器の下半部で、炉床面近くに横置された状態で検出された。上半部が欠損しており、残存しているのは全体の2/3程度である。器形は底面から胴部の接続する部位まではほまっすぐ立ち上がり、そこから外側へ緩やかに開き、上半でややすほんている。器面の色調は褐色だが火熱の影響によって部分的に乳白色や明橙色に変色している。器面全体に単節RLの斜縄文が横位に施文されているが、上半と下半で用いられる原体が異なっており、上半2/3はやや太い縄文、下半1/3には細い縄文が施文される。全体にもろくて壊れやすく、摩耗や剥落が著しいため文様の不鮮明な部分が多い。底径は8.7cm、底面に縦糸幅2mm・横糸幅5mmのスダレ状圧痕がみられる。後期前半の気屋式に相当する。

2は単節RLの斜縄文が施文される胴部小片。住居南東部覆土内から検出されており、器面の摩耗が著しく一部剥落している。後期前半の一群に含まれる。

3~5は単節RLの斜縄文が横位に施文される小片。いずれも炉覆土内から検出されている。色調は乳白色で4・5はやや橙色を帯びており、1の埋設土器と同一個体と考えられる。

6は住居南西部覆土内から出土した深鉢胴部。無文地の器面を横走する細めの沈線で区画し、沈線間に斜縄文を施文する。左上端には縦方向の沈線も確認できる。後期後半の一群に含まれる。

石器 (図版3-56)

56は住居跡西側の搅乱部分より検出された磨製石斧の破損品。先端部を欠損しており、使用時の衝撃による破損と考えられる。現存長約10cm、最大幅5cm、厚み約3cm、石材に硬質砂岩を用いでいる。剥離・敲打調整によって原型を作出したのち、砥石等を用いて表面を研磨調整して仕上げられており、胴部両側縁を中心に、研磨により除去しきれなかった剥離痕・敲打痕が残置されている。搅乱部からの検出であるため造構に伴うとは断定できないが、形態等から判断して後期に属するものと考えられる。

(2) 小ピット群からの出土遺物

縄文土器 (図版1-7~10)

7はP32より出土した深鉢の胴部。やや薄手で焼成は良好。中央と上端に屈曲部を持ち、複数の凹線が横走している。後期後半の一群に含まれ、井口II式に属する。

8はP52より出土した深鉢の胴部。RL単節の斜縄文が横位に施文される。焼成が悪く表・裏面の摩耗が激しい。後期に属する。

9はP14より出土した深鉢の口辺部。口縁付近に無文帶を持ち、以下に単節RLの斜縄文が横走する。色調は暗褐色で焼成は良好。器面全体に煤が付着している。後期に属する。

10はP37より出土した胴部小片。左端に浅めの沈線が斜めに施文されている。後期後半の一群に含まれる。

石器 (図版3-60)

60はP11覆土内より出土したナイフ型石器。珪質頁岩製。背面構成は主剥離方向と一致しており、打瘤が大きく発達している。打面は平坦な单一剥離面で、末端は螺旋状剥離を呈する。背面基部左

側縁および先端部右側縁にはナイフ形石器の二次加工が施されており、腹面右側縁中央には背面側からの浅い平坦剥離（微細剥離痕）が連続して認められ、使用痕と考えられる。

（3）遺構外からの出土遺物

縄文土器（図版1-11～18、図版2）

11は先尖土器の底部付近。上半部にはハの字状の刺突文が施文され、下半部にはヘラ状工具による刺突文がみられる。胎土に纖維を多量に含んでおり、厚手で脆い。早期末～前期初頭に属する。

12は太い貼り付け隆帯を特徴とする口辺部破片。太い隆帯が円形に巡っており、隆帯で囲まれた器面には横方向の沈線が施文される。下端部にも横走する沈線が施文されている。中期最終末期に属する。

13は単節縄文と沈線が施文される胴部破片。地文に単節RLの斜縄文が縦位に施文される。後期前半に属する。

14は沈線と縄文が施文される胴部破片。横走する沈線の下に単節LRの斜縄文が施文される。縄文が施文される部分には多量の煤が付着する。後期前半に属する。

15は沈線と縄文が施文される口辺部破片。表面に単節LRの斜縄文が縦位に施文され、裏面には深めの沈線が二本横走する。口唇部には刻みが施文される。後期前半に属する。

16は沈線と縄文が施文される胴部破片。二本の横走する沈線が施文され、沈線を挟んで上半は無文、下半は単節RLの斜縄文が施文される。後期前半に属する。

17は沈線と縄文が施文される胴部破片。地文に単節LRの斜縄文が縦位に施文されており、上半部に横走する沈線が一本施文される。後期前半に属する。

18は外反する口辺部破片。内外面共に磨かれており、下半部に細い沈線が巡る。細別型式は不明だが後期に属するものである。

19は無文地に沈線が施文される胴部破片。上半部に沈線が横走しており、欠損部脇に縦位の沈線も見られる。後期中盤に属する。

20は沈線が施文される口辺部破片。口縁部に二本の沈線が横走しており、口唇部は一部が摩耗して欠損している。後期中盤に属する。

21は無文地に複数の沈線が施文される胴部破片。やや浅めの沈線が5本横走しており、後期後半に属する。

22は口辺部破片。無文地にごく細い沈線が施文される。後期に属する。

23は沈線と縄文が施文される胴部破片。縦・横に走る沈線間に斜縄文が施文される。後期後半に属する。

24は沈線と縄文が施文される胴部破片。無文地に二本の沈線が横走し、沈線間に斜縄文が施文される。また下部には三叉文らしき沈線が施文される。後期終末～晩期に属する。

25は沈線と縄文が施文される胴部破片。無文地に複数の沈線が施文されており、横走する沈線間に斜縄文が施文される。後期終末～晩期に属する。

26は沈線と斜縄文が施文される胴部破片。器面が摩耗しているが斜縄文が施文された器面に横走する沈線が二本施文される。後期後半に属する。

27は沈線が施文される口辺部破片。無文字の器面に棒状工具によるやや浅めの沈線が横位に施文される。晩期に属する。

28は烈点文と沈線が施文される口辺部破片。口縁部に長径5mm程度の烈点が施文され、器面に渦巻き状の沈線が施文される。晩期に属する。

29・30は単節RLの斜繩文が縦位に施文される胴部破片。後期に属する。

31は単節RLの斜繩文が斜位に施文される口辺部破片。後期に属する。

32・33は同一個体と思われる斜繩文が施文される土器。32は口辺部破片でやや内湾して下部に単節の斜繩文が施文される。33は胴部破片で同様の斜繩文が施文される。いずれも器面に煤が付着している。後期に属する。

34は斜繩文が施文される胴部破片。単節LRの斜繩文と思われるが摩耗が著しいため原体の判別が困難である。後期に属する。

35は単節RLの斜繩文が縦位に施文された胴部破片。後期に属する。

36・37は斜繩文が施文される胴部破片。単節繩文と思われるが器面の摩耗が著しく原体は確認できない。37は32・33と同一個体と思われる。後期に属する。

38は単節RLの斜繩文が縦位に施文される胴部破片。後期に属する。

39は単節RLの斜繩文が縦位に施文される胴部下半部。やや薄手で赤褐色。器面に煤が付着している。

40~42は斜繩文が施文される胴部破片。40は単節RL、41は単節LR、42は摩耗が著しく原体は不明。いずれも後期に属する。

43は単節斜繩文が施文される胴部下半部の破片。底部直上部分の1/4程が残存している。

全体に器面の摩耗が激しいが単節RLの斜繩文が施文されている。後期に属する。

44~48は単節斜繩文が施文される胴部破片。44・45・47・48は単節RL、46は単節LRの原体により施文されている。後期に属する。

49~51は条痕文が施文される一群。49は細く浅い条痕文が縦位に施文される。50は厚手で赤褐色の胴部破片でやや太目の条痕文が横走する。51は全面で条痕文が斜位に施文され、上半部に三本の浅い条痕文が横走する。いずれも後期に属する

52~53は無文的一群。52は折返し口縁を持った浅鉢の口辺部、53は胴部下半部の破片である。いずれも後期に属する。

54・55は底部破片。54には網代圧痕が認められる。摩耗が著しいため編み方は不明である。55にも圧痕らしきものが認められるものの不明瞭なため判別は出来ない。

石器（図版57~59・61）

57はW2より検出された石鎌。最大長約2cm、最大幅約1.5cm、石材にド呂石を用いた凹基三角鎌。先端側がやや厚く、周辺調整は丁寧に施されている。

58はW2より検出された器種不明の石器。石材に凝灰岩を用いており、右側縁に刃部とみられる調整痕が確認出来る。スクレイバーなどの破損した一部とも考えられるが風化が著しく、断定できない。

59はW3より検出された剥片。玉髓製。複数方向からの剥離が背面中央で切り合っており、打面は線状を呈している。バルバスカーが2つ確認できることから、1回目の場所を加撃して剥離できず、2回目の場所を加撃して剥離し直したと思われる。

61はW3より検出された大型剥片。玉髓製で、59と同一個体の可能性がある。同様に複数方向からの剥離が背面中央で切り合っており、打面は平坦な单一剥離面である。バルバスカーが2つあるのは59と同様の理由と考えられる。腹面末端部には使用によると思われる微細剥離痕がみられる。

IV まとめ

前章まで述べてきた要点を整理・要約し、まとめとしたい。

1. 遺構・遺物の分布状況

今回の調査で確認された遺構は堅穴住居跡1棟・土坑1基・小ビット66基である。このうち遺物の出土がみられたのは堅穴住居跡および小ビット22基からで、遺構から検出された遺物数は合計168点である。調査区全体で出土した遺物の総数は約270点で、大半は風倒木痕から検出されたものである。

堅穴住居跡からの出土遺物は炉埋設土器1個体および土器小片9点、磨製石斧1点である。小ビットから検出された遺物は26点である。礫およびP11から検出されたナイフ形石器1点を除いて大半が土器細片であり、1つの小ビットから検出されたのは細片1~2点程度であった。

全体の遺構配置をみてみると、A6,B5,C5,D5など調査区南側壁面に沿って南東から南西に分布しており、遺物の分布とも重なっている。

2. 堅穴住居について

1号堅穴住居では炉石と埋設土器を伴った土器埋設炉が検出されている。埋設土器は器形の2/3程度が復元可能であり、形状・文様などから縄文時代後期前半に属すると考えられることから、この堅穴住居跡の時期は後期前半と推定される。県内において後期に属する住居跡が検出された類例は少ないが、富山市長岡杉林遺跡において後期末の住居跡が検出されている。ここでは土器埋設炉を持った堅穴住居跡が検出されており、住居跡中心付近の床面を楕円形に掘り窪めて焼土・炭化物を含む土を埋め、土器底部を横置して隅丸長方形の石組み炉を構築している〔富山市教委1987〕。本遺跡の場合は炉石の大半が失われているため明確な石組みのプランが不明であるが、土器底部が横置される点や焼土の堆積状況などに長岡杉林遺跡のそれと共通する部分が多い。本遺跡の堅穴住居跡は、搅乱の影響もあって全体のプランや柱穴の構造などは不明であるが、長岡杉林遺跡と類似した堅穴住居であったと推測できる。

3. 小ビットについて

多数検出された小ビットからは縄文時代後期の遺物が検出されている。これらの小ビットは掘立建物の柱穴痕としての可能性が考えられるが、ビット内に明確な柱根跡はみられず、また複数のビットが密集していることもあるが、具体的な建物構造を想定できなかった。検出された小ビットのうちいくつかは調査区南壁にかかっているものもあり、小ビットの遺構分布は調査区域外へとさらに広がっているものと推定される。

4. ナイフ形石器について

本遺跡から検出された旧石器時代のナイフ形石器は側縁に部分的な2次加工が施された小型のものである。福光町人母シモヤマ遺跡等に類例がみられることから〔西井1972〕、北陸における茂呂系石器群に属すると考えられる。時期は関東の相模野編年でいう第VII段階にあたり、ナイフ形石器文化の終末期に属する。

5. 尖底土器について

本遺跡から出土した尖底土器底部は纖維を多量に含む厚手のもので、文様は「ハ」の字状の刺突文と竜状工具による刺突文の2種類が規則的に施されている。なかでも「ハ」の字状の刺突文は、県内の南太閤山I遺跡や極楽寺遺跡から出土した刺突文を多用する土器群に類例があり〔富山県

教委1965・1986]、新潟県卷町布目遺跡の出土資料にも同様の刺突文が認められる〔新潟県考古学会1999〕。縄文時代前期前葉の極楽寺式土器に相当すると考えられる。

以上の結果から茶屋町西山遺跡の性格を以下のように考察する。

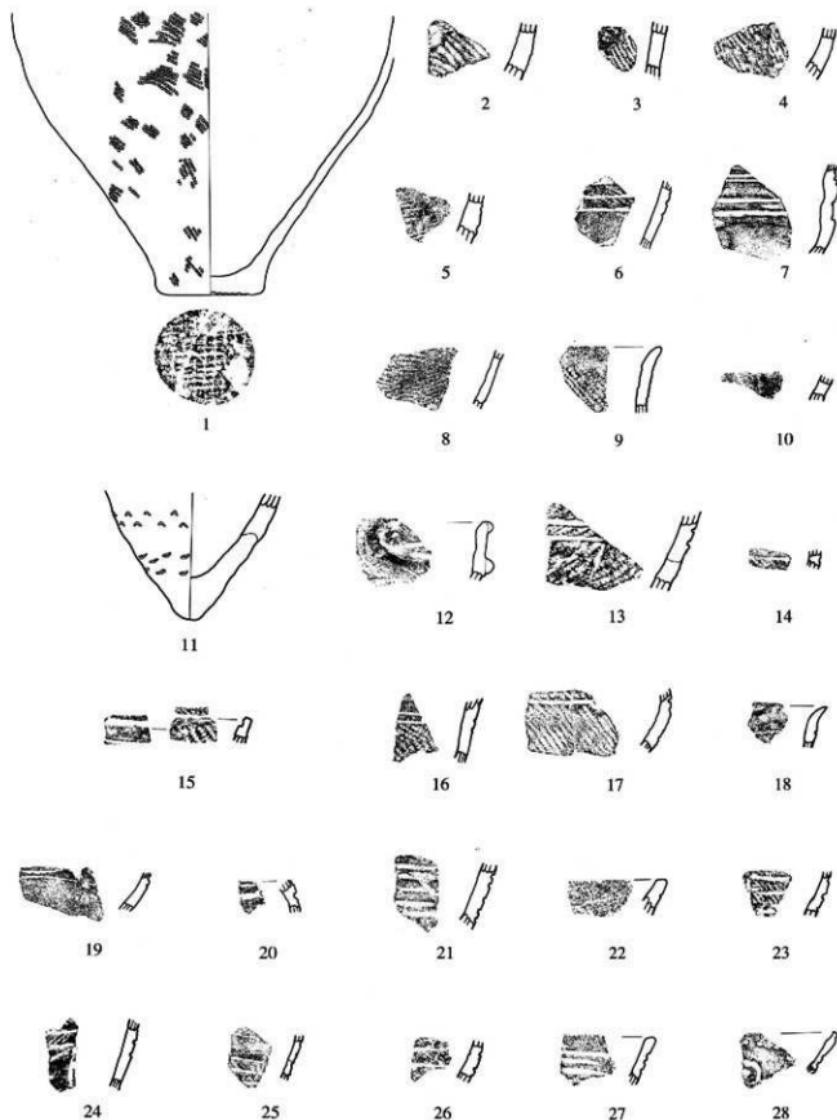
遺跡の存続年代は主に縄文時代後期前葉から晩期初頭にかけてである。遺物の出土状況をみると、多少の数の増減は見られるものの後期から晩期にかけての資料がほぼ連続して検出されており、当該地において継続的に集落が営なまれていたことが想定される。

呉羽丘陵に位置する本遺跡および長岡杉林遺跡で検出された住居跡はいずれも1棟のみであり、出土する土器の量も少なく、周囲にも他の住居跡はみられないことから、単独もしくは広い範囲に住居が点在する集落形態と考えられる。これは県内の後期末～晩期の集落跡である井口遺跡や石川県野々市町の御経塚遺跡において多数の住居跡が中央の広場を囲んで馬蹄形又は円形状に分布する状況〔井口村教委1980、野々市町教委1983〕と対照的であり、同時期における呉羽丘陵周辺の集落が独特的な形態をとることを示している。

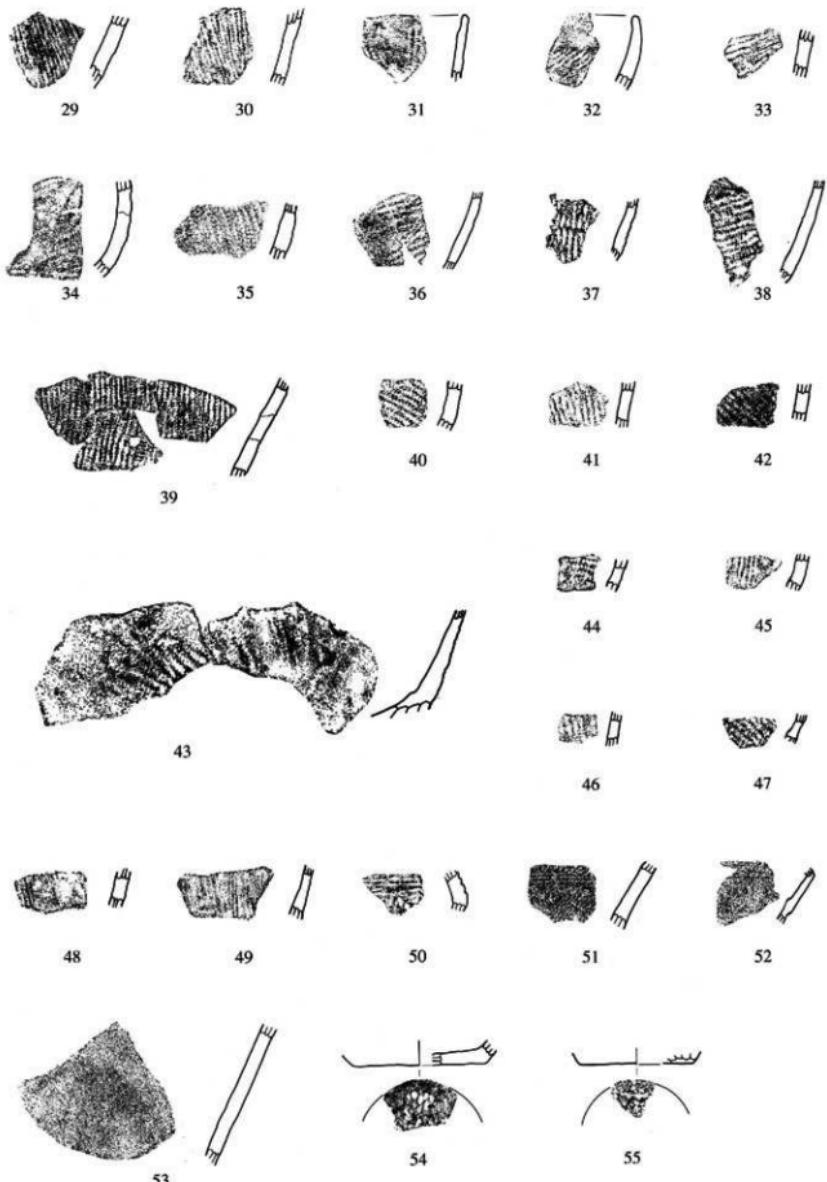
また、本遺跡北側に隣接する北代西山遺跡では前期前葉および後期・晩期の資料が検出されており、狩獵・漁撈・採集のキャンプサイト的な性格のものと考えられている〔富山市教委2000〕。一定期間の定住を営んだ本遺跡とは性格を異にしているが、当該地域が縄文時代における生活の好立地としてしばしば利用されていたと考えられる。

参考文献

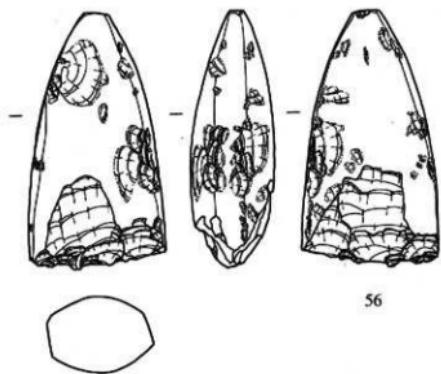
- | | |
|-----------|---|
| 井口村教育委員会 | 1980 「富山県井口村井口遺跡発掘調査概要」 |
| 奥村吉信 | 1986 「北陸にみる茂呂系石器群の性格」『旧石器考古学』33 |
| 金沢市教育委員会 | 1981 「金沢市笠舞遺跡」 |
| 小島俊彰 | 1981 「井口式土器」『縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ』雄山閣 |
| 諏訪間順 | 1988 「相模台地における石器群の変遷について」『神奈川考古』24 |
| 富山県教育委員会 | 1976 「富山県大沢野町直坂Ⅱ遺跡 発掘調査概要」 |
| 富山県教育委員会 | 1965 「極楽寺遺跡発掘調査報告書」 |
| 富山市教育委員会 | 1986 「南太郎山Ⅰ遺跡－七美・太閤各・高岡線内遺跡群発掘調査概要4」 |
| 富山市教育委員会 | 1980 「今市遺跡・北代遺跡」 |
| 富山市教育委員会 | 1981 「北代遺跡」 |
| 富山市教育委員会 | 2000 「北代西山遺跡発掘調査報告書」 |
| 富山市教育委員会 | 1997 「史跡北代遺跡発掘調査概要－ふるさと歴史の広場事業に伴う縄文中期集落の発掘調査－」 |
| 富山市教育委員会 | 1998 「史跡北代遺跡発掘調査概要Ⅱ－ふるさと歴史の広場事業に伴う縄文中期集落の発掘調査－」『長岡杉林遺跡』 |
| 新潟県考古学会 | 1999 「第2章 縄文時代」『新潟県の考古学』高志書院 |
| 西井龍儀 | 1972 「二、先土器時代」「富山県史」考古編 |
| 丹羽佑一 | 1989 「四線文系土器様式」『縄文土器大観4 後期、晩期、統縄文』小学館 |
| 野々市町教育委員会 | 1983 「野々市町御経塚遺跡」 |
| 卷町教育委員会 | 1994 「第1編 原始」「卷町史」通史編（上巻） |
| 濱 長 | 1972 「五、縄文後・晩期」「富山県史」考古編 |
| 南 久和 | 1989 「北陸晩期土器様式」『縄文土器大観4 後期、晩期、統縄文』小学館 |
| 米沢義光 | 1989 「氣屋式土器様式」『縄文土器大観4 後期、晩期、統縄文』小学館 |



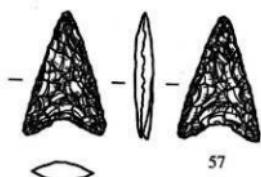
図版1 遺物実測図 (1は1/4、2~28は1/3)



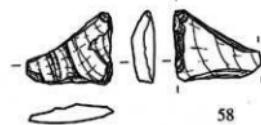
図版2 遺物実測図 (1/3)



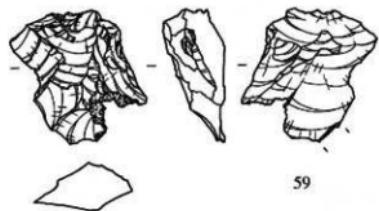
56



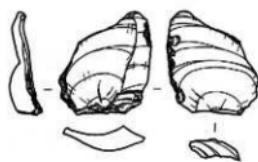
57



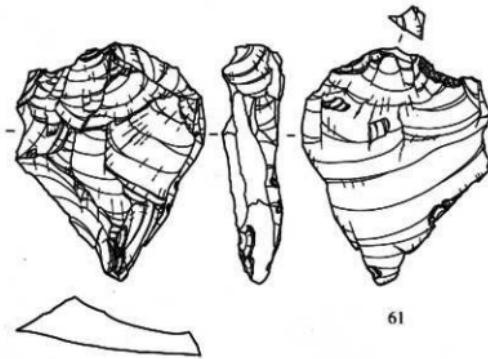
58



59



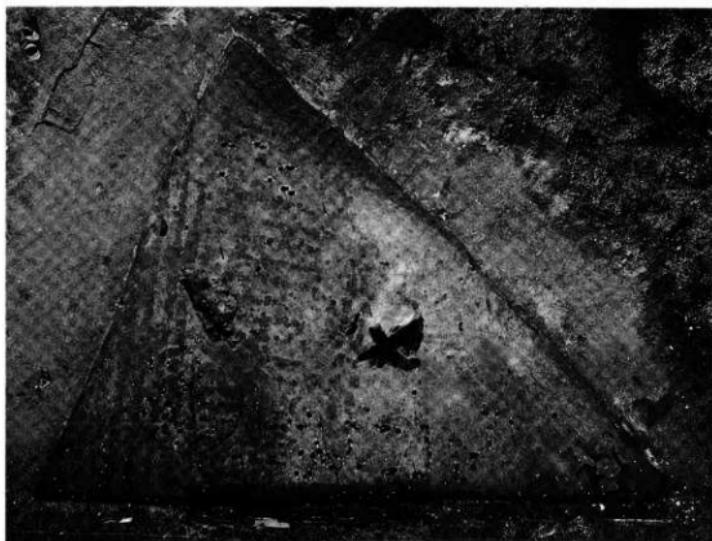
60



61

図版3 石器実測図 (56は1/2、57は原寸、58は4/5、59~61は2/3)

写真図版1



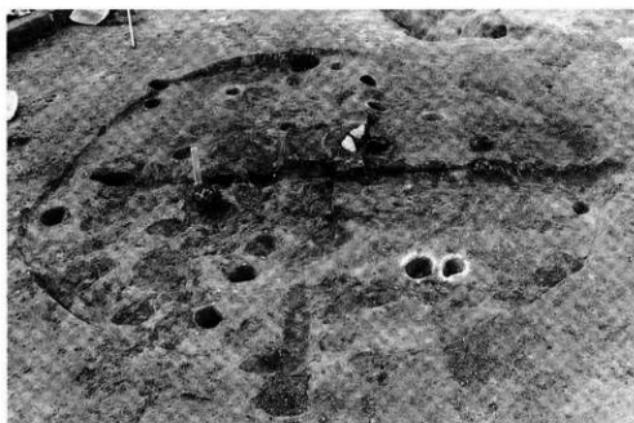
調査区全体（上空から） 上が北



調査区遠景（上空西側から）



1号竖穴住居跡（上空から）上が北

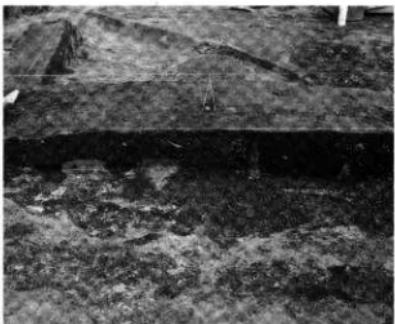


1号竖穴住居跡近景（南から）

写真図版3



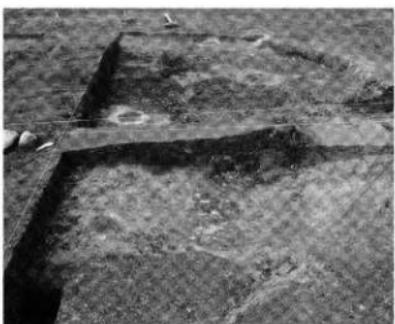
1号竪穴住居跡土層写真（南から）



1号竪穴住居跡土層写真（南から）



1号竪穴住居跡土層写真（東から）



1号竪穴住居跡土層写真（東から）



1号竪穴住居跡炉石（東から）



1号竪穴住居跡 土器埋設炉（東から）



埋設土器出土状況（南東から）



炉土層断面（東から）

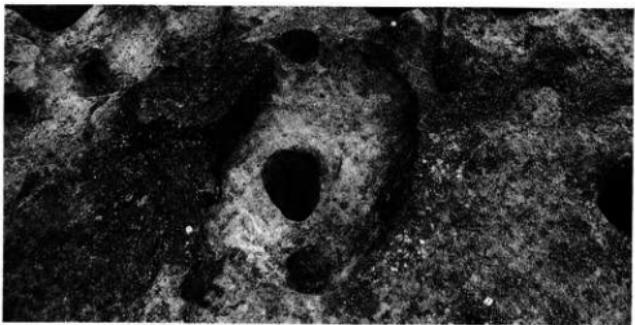
写真図版5



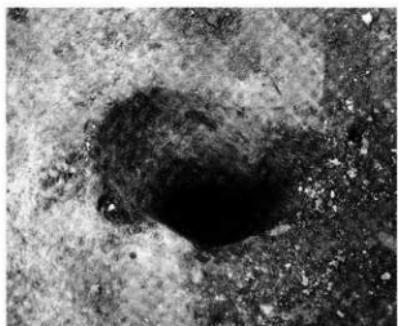
炉焼土分布状況（東から）



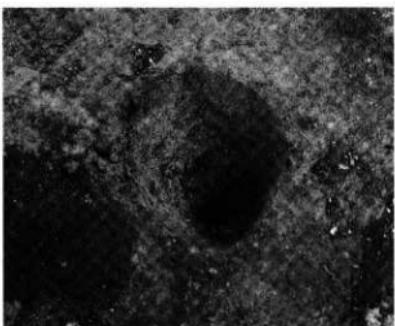
か焼土堆積状況（北から）



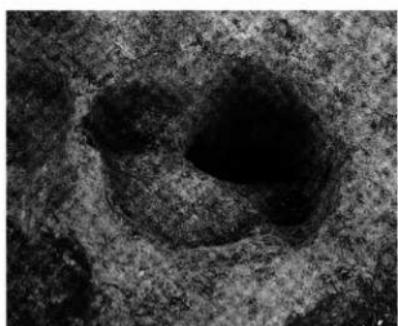
炉完掘状態（東から）



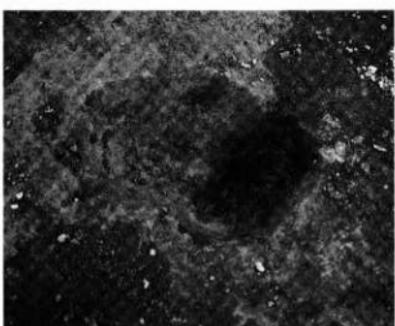
SP1 (北西から)



SP19 (西から)



SP5 (北から)

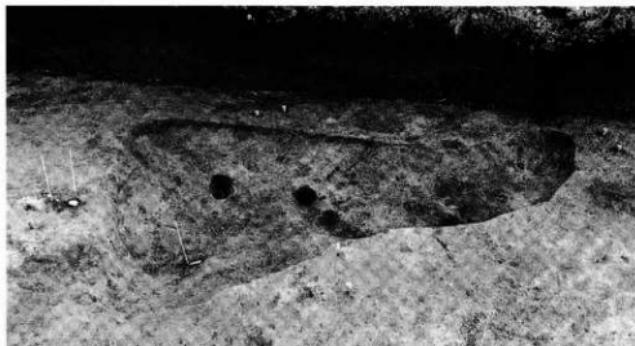


SP17 (北から)



1号竪穴住居内小土坑 手前はSP6 (南西から)

写真図版7



SK1（北から）



南部小ピット群（南東から）



小ピットと風倒木痕（南東から）



石塚出土状況（北から）

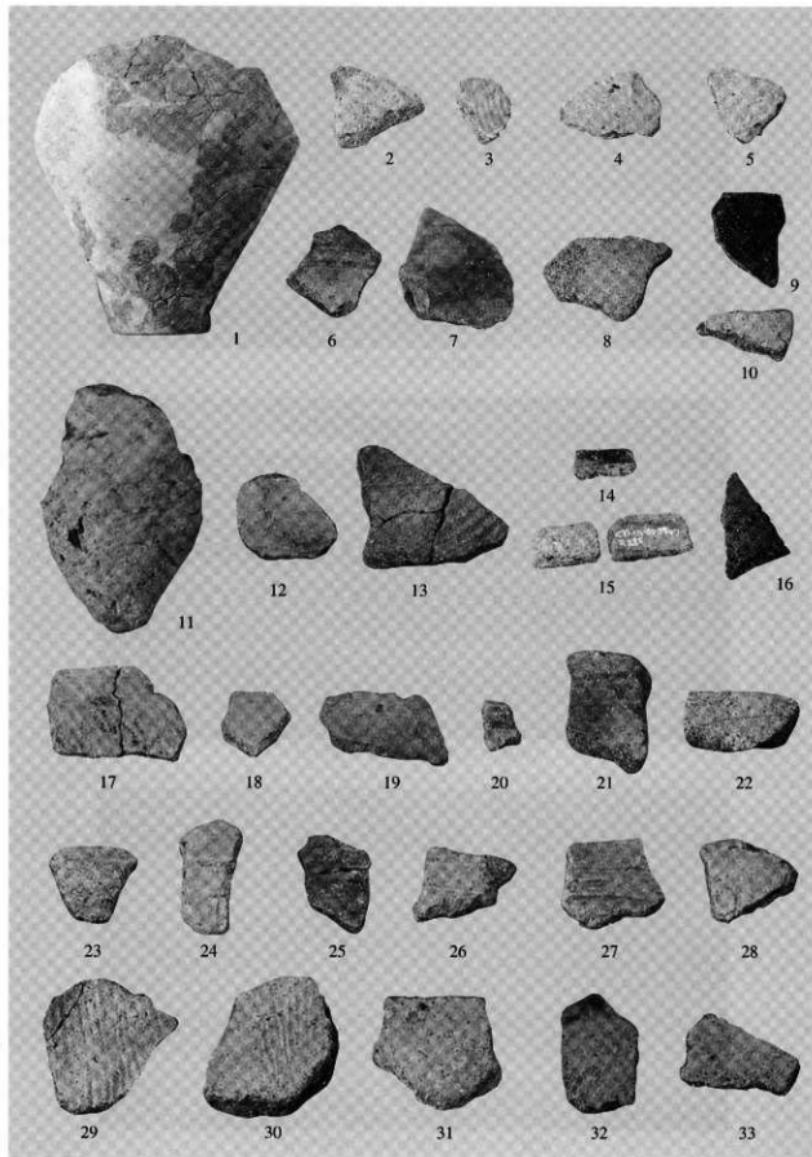


1号竪穴住居検出作業風景（南から）

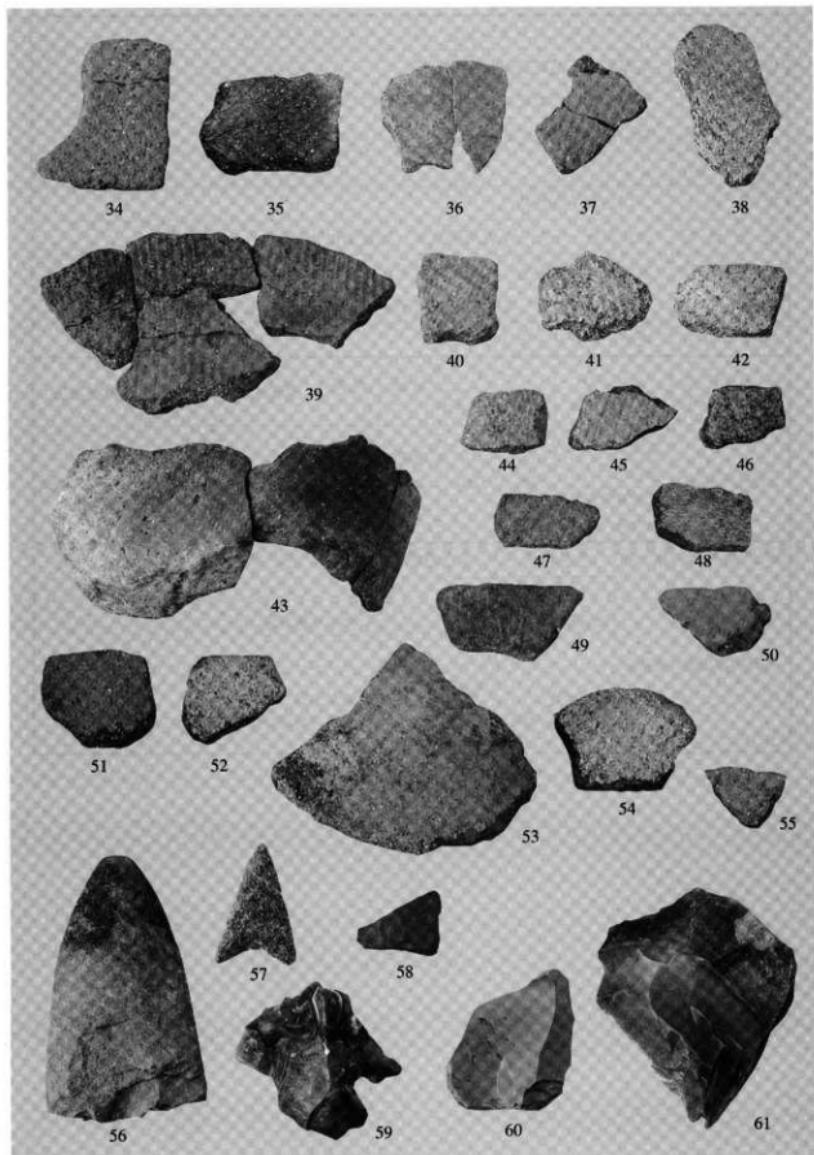


試掘トレンチ 炉検出状況（南東から）

写真図版9



縄文土器 (1は約1/4、2~33は約1/2)



縄文土器・石器・旧石器 (34~42・44~55・56は約1/2、43は約1/3、58・59・61は約2/3、57・60は原寸)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ちゃやまちにしやまいせき はっくつちょうさほうこくしょ						
書名	茶屋町西山遺跡発掘調査報告書						
副書名	都市緑化植物園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ名	宮山市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	111						
編著者名	古川知明・高野裕二						
編集機関	株式会社 中部日本鉱業研究所 埋蔵文化財調査室						
発行機関	宮山市教育委員会 埋蔵文化財センター						
所在地	〒930-0803 富山県富山市下新本町5番12号 TEL (076) 442-4246						
発行年月日	西暦 2001年3月12日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
茶屋町西山遺跡	富山県 富山市 茶屋町字長柄 2191外	201	36度 164 42分 31秒	137度 11分 03秒	20000829～ 20001113	400	都市緑化植物園建設 に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
茶屋町西山遺跡	集落跡	旧石器時代 縄文時代 (前期、後期～晩期)	竪穴住居1棟 土坑1棟 小ピット66基	ナイフ形石器 縄文土器 石器(磨製石斧・石鎚など)			

富山市埋蔵文化財調査報告 111
富山市茶屋町西山遺跡発掘調査報告書
—都市緑化植物園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2001（平成13）年3月12日発行

発行 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0803

富山市下新本町5番12号

Tel 076-442-4246

Fax 076-442-5810

E-mail : maizoubunka-01@city.toyama.toyama.jp

編集 株式会社中部日本鉱業研究所

〒933-0927 高岡市利屋町9番

印刷 前田印刷株式会社

